

京都外国語大学 ラテンアメリカ研究所 紀要

2021

〈論文〉

中米イロパango火山の破滅的大噴火は、タスマルを中心とした
古代都市チャルチュアパを放棄させたのか？
その大噴火の絶対年代はいつなのか？

..... 柴田 潮音 1

2021年ペルー大統領・国会議員選挙
—カスティージョ急進左派政権登場の過程と「地方の叛乱」の行末—

..... 中沢 知史 39

現代におけるユカタン・マヤ系先住民間の「好き」に関する考察
—言語学及び人類学的視点からの意味分析—

..... エリ・カサノバ・モラレス／大倉 由布子 63

〈研究ノート〉

戦前日本におけるラテンアメリカ研究の見取図

—野田良治、田中耕太郎、天野芳太郎の業績、およびその他の研究の担い手—

..... 辻 豊治 89

〈研究展望・動向〉

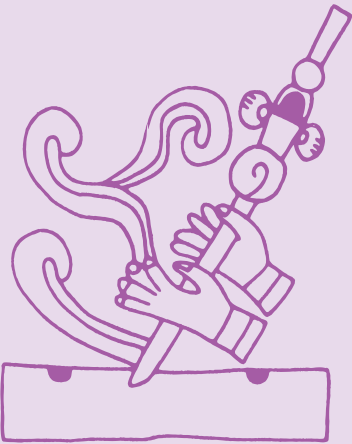
16～18世紀のマヤ研究における考古資料と文献史料の重要性と問題点

..... 白鳥 祐子 105

〈書評〉

渡邊利夫著『国際政治のなかの中南米史—実体験を通してリアリズムで読む—』

..... 牛島 万 117



〈書 評〉

渡邊利夫著

『国際政治のなかの中南米史—実体験を通してリアリズムで読む—』
(彩流社 2021年 824頁)

牛 島 万*

本書の著者である渡邊利夫氏も序章で述べているように、近年、ラテンアメリカ史の概説書が新たに出版されていない観がある。評者が思うに、広域で多数の国が存在するラテンアメリカ地域の、何世紀にもわたる歴史の全体像を、一国史観だけでなく、巨視的（域内およびグローバル）に捉えて、それを的確に描き出し、膨大な厚みのある本にまとめる作業は、中南米史に対する造詣の深さに加えて、そのために必要な文才を含めた、あらゆる能力を要する一大作業である。この意味で、氏のこのたびの功績は、学界においても深く歴史に刻み込まれることであろうと考える。以下は、本書の目次である。

序章 この本の切り口

第1章 植民地時代の中南米—中南米社会の基盤ができた時代

第2章 中南米諸国の独立—多様な展開を見せた独立運動

第3章 国際政治から眺めた独立—ブラジルの独立・帝政と「モンロー宣言」

第4章 19世紀、波乱の中南米政治—西半球で勃発した主な戦争と「メキシコ革命」

第5章 米帝国主義と民衆の政治参加—「善隣外交」、南米のポピュリズム政治

第6章 冷戦構造に組み込まれる米州—「キューバ革命」とケネディの左翼対策

第7章 権威主義体制と人権の問題—米国の対中南米政策、「解放の神学」

第8章 民政化と中米紛争の80年代—「新経済自由主義」とメキシコの民主化

第9章 冷戦後の混沌とする中南米—今米州の基底潮流は、そして日本のフジモリ外交

終章 歴史と地理から見る中南米の姿—それと、日本の中南米外交

読者のみなさまへ

索引

引用参考文献

ここでは、紙数の関係もあり、本書の特徴をいくつか取り上げつつ、評してみたいと思う。本書の第1の特徴は、中南米諸国の独立に関して2章分（全824頁中140ページ相当）を当てていることである。その背景のひとつに、個々の国の独立史はさることながら、独立史を当時の国際社会の中で位置づけることに、筆者が意義を見出しているからに他ならない。しかも元宗主国のスペイン（ブラジルのみがポルトガル）以外のイギリス、フランス、米国の動向にまで配慮した詳細な記述は、これまで邦語で書かれたラテンアメリカ史のいずれの概説書も十分には果たせな

* 京都外国語大学

かったことであり、本書の大きな特徴となっている。著者自身も述べているように、本書の重要な視座として、従来のすぐれた諸研究から導き出された先哲の考えを紐解きつつ、さらにそこに外交官としての氏自身の職業経験から体得した知見が活かされている。具体的には、中南米各国の独立史を域内およびスペインとの関係で捉えることに留まらず、フランス、イギリス、米国がこの中南米の独立をどのように見ており、また実際にどう関わったのかについても分析の対象とし、さらにはそれを「大西洋システム」のなかで位置付けるといふ、丁寧な作業が見事に披露されている（262-263頁）。

1825年になってはじめてイギリスは中南米の独立を認めたが、このイギリス外交の転換には、米国の動向が深く関わっている。1819年にアダムズ・オニス条約でフロリダをスペインから購入し、モンロー大統領が1822年に中南米諸国の独立を認めた。著者は、「中南米の独立を擁護するために出されたはずの『モンロー主義』がいつの間にか干渉の口実に使われるようになった。そこには中南米の独立を擁護しようとして出された宣言の趣旨と矛盾がある」と述べている（273頁）が、果たして純粋に、米国にとって、中南米の独立を擁護することが主たる目的であったかどうかは検討が必要であろう。イギリスと米国の覇権をめぐる勃発した英米戦争（1812-1814年）の苦い経験により、勢力均衡を保つことを両国とも慎重に行なってきた。従って、今一度確認しておきたいことは、1823年のモンロー・ドクトリンは、対ヨーロッパに出された相互不干渉の提言であったことである。中南米諸国に直接向けたものではない。本書では、米国のフィリバスター（不法戦士）の海外進出の記述がほぼ皆無であるが、米国人フィリバスターによる外国での政治介入事件が増えた。米国政府は自国のフィリバスターを処罰するための中立法（1818）を発令したが、その一方で、民間人であるフィリバスターの行動を厳しく制止して管理することを、意図的に行わなかった節がある。やがて領土拡張主義が国是とされると、その傾向は高まり、フィリバスターの遠征活動を看過する米国の政権も誕生してきた。この証左は、本書がある先行研究から直接引用している、1850年代（272頁）ではなく、それ以前の少なくとも1840年代前半にすでに見られた。1842年のタイラー大統領の年次教書ではモンロー・ドクトリンが援用されている、というのが通説となっている（タイラーの年次教書の一節を参照。We may be permitted to hope an equal exemption from the interference of European Governments in what relates to the States of the American continent.）。

その精神は、1845年のポーク大統領の年次教書に受け継がれる。ただし、1830年代から40年代にかけての中米沿岸のモスキート地方を占有したイギリスや、1837年のフランスによるベラクルス港封鎖、1845年から49年まで続く、英仏のブエノスアイレス港封鎖など、米国政府は近隣地域以外へは自らの領土拡張政策の対象にしなかったことも事実である。このように考えると、モンロー主義の援用の「対象」に差別化が図られただけであって、モンロー主義そのものの精神に変化はなかったとも考えられる。

第2の特徴として、本書は従来の学説を祖述したうえで、著者の見解を述べていることである。先行研究の成果について、懇切丁寧にふれており、その点で一般読者に本書の記述方法が少し煩雑な印象を与えることが懸念されるが、評者のように授業等でラテンアメリカ史を講じる立場にある者にとっては、本書はむしろ百科事典か良質の参考書の観がある。筆者は、若い人が中南米に行く前に、というキャッチフレーズを用いて、読者への関心を喚起しようとしているように感じ取れたが、序章の第1行目に早速あるように、「一般向けの概説書とは言えない」（7頁）とも

述べている。

この点では、ラテンアメリカの歴史の素養が一定以上ある、しかも冷戦期の時代をかつて歩んできた現在は年配の読者が、一番本書に興味を持つのではないかと思った。評者が若い時に学んだ解放の神学などは最近ではめっきり聞かれなくなったが、本書で書かれている先行研究の記述を読み返すと、個人的にはその当時のことが鮮明に思い出され、あの頃の時代背景に立脚した、今とは多少異なる歴史観にふれることができ、大いに勉強になる。

その延長線上で、ひとつ気になることがある。先学の教えに従うために、本書では先行研究が丁寧に挙げられている。例えば、権威主義やポピュリズムが学問的にかつてブームだったが、評者も学生のときに読まれたウィーアルダの書物やその関連の日本人研究者の先行研究が本書でも挙げられている。そのなかで、ウィーアルダ自身も指摘しているが、軍政や権威主義体制が出現する政治文化の問題点に着目している。つまり、「負」のイベリア的政治文化は所与のものとして扱われ、ラテンアメリカに根本的に民主主義が根付かない大きな理由の一つに考えられた（531-532頁）。スペインまたはイベリア的な負の政治文化が、先の阻害要因であるという指摘は、何度か本書で繰り返し出てくるが（708、750頁など）、この指摘自体は、評者も歴史学を専攻する者として、さほど違和感はないが、政治学や経済学に分野からすれば、文化を所与の規定要因として捉える考え方に対して、否定的な意見が出てくるのが予想される。外交の現場で長年活躍されてきた筆者の結論として行き着く先がもしここにあるとすれば、それがもう少し本書の記述のなかでアピールされていれば、氏の見解の独自性がさらに出ておもしろかったかもしれない。

最後に、日本とラテンアメリカの関係にふれていることは格別類書にも見られる話で特別なことではないが、中国とラテンアメリカの関係に1節を設けられていることは（697-705頁）、まさに本書が時代の流れや世の中のニーズに沿ったタイムリーな本の証左であり、外交筋の著者ならではと思われる。一般に、わが国の学界ではラテンアメリカ研究に欧米諸国が出てくることはあっても、中国、台湾との関係を学問的に取り上げる研究者はまだ少ないように思う。その意味で、本書は一石を投じた形になっている。

本書を通じて、改めてラテンアメリカの概説書を書くことの意義とそのための労力を再確認できた。「木を見て森を見ず」を得意とするのが一般的な研究者であるとすれば、その逆については一生涯をかけても成し遂げることができるとは限らないと思う。このことは、そう言っている評者自身へのまさに戒めに他ならないが、私と同様、本書から感銘を受けた読者は決して少なくないのではないかと思う。極めて良書である。

BOLETÍN del

Instituto de Estudios Latinoamericanos
de la Universidad de Estudios Extranjeros de Kyoto

Instituto de Estudos Latino-Americanos
da Universidade de Estudos Estrangeiros de Kyoto

2021

< ARTÍCULOS >

¿La erupción catastrófica del Volcán Ilopango en El Salvador Centroamérica habría forzado a los habitantes de Chalchuapa a abandonar el centro ceremonial Tazumal?, ¿Cuál es el fechamiento absoluto de la erupción volcánica?
..... Shione SHIBATA 1

Elecciones Generales de Perú de 2021:
el proceso del surgimiento de la izquierda radical y el futuro de la “subversión de provincias”
..... Tomofumi NAKAZAWA 39

Reflexiones en torno a la significación de frases de “gusto” en maya yucateco actual: una perspectiva lingüística y antropológica
..... Elí CASANOVA MORALES/Yuko OKURA 63

< ESTUDIOS PRELIMINARES >

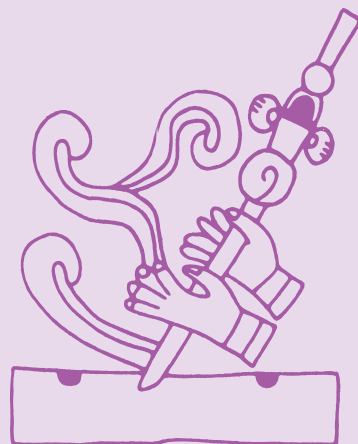
Esbozo de los estudios latinoamericanos en el Japón de la preguerra — Los logros de Ryoji Noda, Kotaro Tanaka, Yoshitaro Amano y otros autores —
..... Toyoharu TSUJI 89

< INFORME DE INVESTIGACIÓN >

The Use of Both Archaeological Data and Historical Documents in Studies of the 16th-18th Century Maya: Importance and Issues
..... Yuko SHIRATORI 105

< RESEÑA DE LIBROS >

Historia latinoamericana en la política internacional: a través de la perspectiva de realismo basada en la experiencia real por Toshio Watanabe
..... Takashi USHIJIMA 117



Vol.
21